

【怨みに報いるに徳を以てす】

第二次大戦が終った時、中国の蒋介石総統が、「怨みに報いるに徳を以てす」と言って、日本軍将兵を厚く遇してわが国に送り還したことは有名な話ですが、この言葉は古い老子の言葉です。

“うらみ”という言葉を表わす漢字には、“怨”“恨”“憾”などがありますが、“恨”は、いつかは必ず仇を討ってこのうらみを晴らしてみせる、というように、いわゆる「根にもつ」といううらみです。

“怨”は、仇を討って直接にうらみを晴らすことは出来ないけれども、せめて皮肉ぐらいは言って、遠回し(婉曲)にでもうさを晴らさずにはいられないという、うらみを言います。

“憾”は、怨や恨と違ってその場限りのうらみです。「残念だなあ」と心に感ずるだけで、あとにまで残らない一時的、表面的なうらみです。

“徳”は元“德”で、恵は恵でした。真っ直な心という意味の字で、“真心”を表わした字です。他人を思いやる“いつくしみ”の心、つまり仁徳のことです。

「怨みに報いるに徳を以てす」というのは、自分をひどい目にあわせた者に対して、仇を討たないまでもせめて皮肉ぐらいは言ってやりたいのが当たり前なのに、逆に恩恵を与えてやることを言います。

この老子の言葉に対して、孔子は、「徳に報いるに徳を以てし、怨

に報いるに直を以てす」と言っています。“直”とは、“率直”“素直”“正直”ということです。

「怨みのある人に対してまで恩恵を与える」ということでは、恩恵を与えてくれた人と同じ扱いになってしまっていて、それでは人情に反する。もっと“正直”であれ、というのが孔子の意見です。

この「正直であれ」が、具体的にどういう行為であるかは、意見の分れるわけがあり、私にも自信ある解答は出来ません。ただ、この“直(正直)”ということで、論語に次のような問答があり、これがその“直”を考えるのに役立つと思います。

ある県の長官が、孔子に向かい、「私の県には正直者がいます。ある男が羊を盗みましたところ、その男の子供がこれを役所に訴え出ました」と、自慢気に話しました。

すると孔子は「私の国の正直はそれと違います。親が盗んだことをその子が知ったとしても、子は親のためにその事を隠します。反対に、子が盗みをし、親がそれを知っても、親はその事を隠します。その隠す行為こそが人情であって、その人情に素直に従うのが“正直”というものです」と答えました。

老子の言葉は、いかにも道教の開祖らしく宗教的であり、孔子の言葉は極めて常識的で、人間味に溢れており、それぞれによくその人柄を表わしていると思います。